

透析医のひとりごと

「君の膵臓をたべたい」で思い出した ある急性膵臓炎患者さんとの出会い

佐中 孜

「君の膵臓をたべたい」、今、この衝撃的なタイトルの単行本が話題になっている。2017年は映画にもなった。翌年の8月19日にはテレビ初放映も行われたという。住野よるという小説家のデビュー作とのことである。相当多数の人々の心を捕まえたのだろう。2016年の本屋大賞2位に輝き、累計発行部数は200万部を超えたとか。

ここで、この小説の読後感や衝撃的なタイトルの意味を論じるつもりはない。率直に思い出したのは、今から30年以上前に経験した急性膵臓炎のある患者さんの治療にまつわる一部始終である。断っておくが、この患者さんに「君の膵臓をたべたい」と言われたわけではない。ただし、この患者さん御自身はフランス料理、イタリア料理、ホルモン焼きは相当お好きであったようで、今更確認はできないが、いわゆるシビレと呼ばれるウシ、ヒツジ、ブタの膵臓はお好きだった可能性がある。

この当時、私自身が在籍していた東京女子医科大学腎臓病総合医療センターにおいて、急性腎不全合併あるいは基礎病態として慢性腎不全を有した患者の急性膵臓炎12例を経験しており、これらをもとにして3編の論文にまとめている。それらのうちの1例がこれから紹介する思い出の患者さんである。年齢、性別はあえて伏せることにする。

思い出の患者さんは相当の多忙と大食大酒をきっかけとして悪心、嘔吐、腹痛が出現。近医にて、血清アミラーゼ値2,307 IU/lの急性膵臓炎と診断されていたが、第3病日より、乏尿となり、急性腎不全として当院に転院し、私が受け持ち医となったものである。当院入院時の検査成績は、白血球増多症、貧血、高血糖、高LDH血症、高尿素窒素血症、低Ca血症、代謝性アシドーシスなどRanson's scoreで評価すると7点がつき、多臓器不全を合併した重症型急性膵臓炎であることが示唆されていた。

当然のことながら、型のごとく絶飲、絶食、経静脈栄養とし、蛋白分解酵素阻害薬、抗生物質の投与とともに、血液透析療法が開始された。しかしながら、まもなく、確かに血清尿素値は低下したものの、血清アミラーゼ値は上昇の兆しささえも認められ、悪化傾向さえ認められた。

壊死性膵臓炎であり、いずれ腹膜炎を含む感染症も合併し、膵嚢胞も形成するようになると直感した私達は、直ちに腹腔洗浄も兼ねて腹膜灌流法を追加、ないしは、単独実施に変更、それも今で言うところの1日24時間、20~30L電解質液による洗浄灌流で、50~60日間に及ぶ連続的、持続的な腹膜灌流である。結果は無論、目論み通りで、本法によって汎発性腹膜炎を惹起することなく、1日2,000~18,000単位のアミラー

ゼが除去され、血清アミラーゼ値も正常値へと回復したのである。

その後、小規模ながらも膵炎の再発もあったし、腹膜灌流排液の血性化、黄疸の出現もあったが、膵嚢胞に対する後腹膜ドレナージ、さらには、胆嚢瘻造設術などを経て、約9カ月後に無事退院の運びとなった。この間、文字通り一般病室をICUにみたてての濃厚治療であった。

患者さん御自身もさぞ辛くも不安な日々だったと推察するが、寡黙で、弱音を吐くことのない、この方の作品の主人公通りの方だったのを思い出す。作品名も敢えて伏せることにする。ご家族の方々も本当にしっかりした方々だった。付き添いの方（性別が判別できるので、ここでは敢えてこのように表現する）はほぼ毎日、患者さんを静かに擦ったり、退院に備えてなのか手仕事をなさっていた。検査値をはじめとする病状に対する私の説明にも的確にご理解下さっていたこともあらためて思い出し、感謝もし、感心している。

退院時に患者さんが私達に送ってきたVサインも、本文を書きながらあらためて鮮明に思い出す。

その後、今日に至るまで、本患者さんのような重症型急性膵炎を診察する機会もなくなったのか、20年以上遭遇していないような気がする。薬剤の進歩、生活習慣の健全化もさることながら、今回思い出として紹介した経験については経過図、CT画像も添えて3編の論文にまとめているので、これらが役に立ったと自惚れてもみたい。また、CAPDが在宅医療としての普及の緒についたのが1964年であったことを思うと、わずか2年後にその特性を他疾患に適用した我々の先見性、応用力に対しての自画自賛をお許しいただけるとすれば、望外の幸せと言わざるをえない。

この方の作品の主人公の生き方に感化された若者も多いのではないかと思うと、当時の若者が「君の膵臓をたべたい」の主人公と奇しくも同世代だということにも何か繋がりを感じる。重症型急性膵炎に対する治療法としての持続的腹膜灌流法を後世に伝えることができたのもこの患者さんのお陰かもしれない。

最後に、今回紹介した患者さんの社会的な背景、年齢、性別、発表論文名は敢えて申し述べませんでした。本文を最後までお読みになられた方には秘密厳守をお誓い頂いたうえで、内緒にお伝えしますので、ご対面のさいには耳打ちして下さい。

江戸川病院（東京都）/メディカルプラザ市川駅（千葉県）